

教師の  
腕前診断

今回のテーマ

「子どもの善意を信じる  
注意の仕方」

子どもとは良い関係を構築したいものです。だからといっていつもほめてばかりというわけにはいきません。時には注意しなければならぬこともあります。

子どもとの良い関係を保ちつつ、反省を促す注意の仕方が今回のテーマです。

## 1 黙って近寄れば私語が止む

今日は朝会です。体育館に子ども達が集まります。朝会が始まるまで子ども達は体育座りをして待っています。

## Q1 ある子が周りの子に話しかけたり、ちよっかいを出したりしています。こんな時、どうしますか？

- ① 「〇〇さん、静かにしなさい」とその子に注意する
- ② 相手をしている子に「無視しなさい」と声をかける
- ③ 話しかけている子の傍に行く

③の「話しかけている子の傍に行く」です。こういう時、相手をしている子は、教師の目を意識しながら話し相手をしたり、仕返しをしたりしています。このケースでは話しかけている子よりも話しかけられている子のことを案じてやります。その子を救ってあげなければなりません。相手をしている子は罪悪感を覚えながら対応しています。そういう意味では「被害者」です。

相手をしている子を注意すると「だって、〇〇さんが話しかけてきたんだもん」「だって、先にちよっかいを出してきたのは〇〇さんだよ」

と自分の正当性を主張します。ある意味では正論です。自分はしっかりとしようとしているのに邪魔されているのです。こういう「だって」注意は反発を招き、子どもとの良い関係作りの阻害要因となります。

困っている子は助けてあげるのが大人の務めです。「だって」を「おかげさまで」に変えてやる必要があります。「先生のおかげで相手をしなくて済む」と、困っている状況を救ってあげるのです。そうすれば感謝されます。「あつ、この先生は闇雲に注意するのではなく、ちゃんとわかってくれるのだ」と信頼してくれます。

注意しなければならぬ対象はひとりです。体育館に集合したら私語をしないということはわかっています。わかっているが話しかけたり、ちよっかいを出したりしているわけです。そんな子でも、自分がいけないことをしているという罪悪感はあるはず。「普通」にできないということは心の不安定さがあるからです。言葉で対応しようとするのは難しいでしょう。わかっているがやっているので、注意すればするほど反発します。

仮に「静かにしろ」と注意して黙ったとしてもそれは表面的にそうしているだけで、内心では教師への憎悪を募らせるだけです。「この先生は僕の気持ちをわかってくれない」と心が離れていきます。

話しかけている子にも罪悪感があり、「僕は『普通』にできません。何とかしてください。助けてください」という SOS を発信していると解釈すると、注意よりも共感です。

そこで、その子の傍に歩み寄ります。朝会の最中に教師が子どもの列に入るといことは

通常の行動ではありません。「注意をする」「具合の悪い子がいる」と子ども達は察します。「普通」にしている子達は「自分かな?」と不安になります。自分の傍を教師が通り過ぎると安堵し、「じゃあ、誰の所へ行くのだろう」という目で教師の歩みを追います。

余談ですが、先日車を運転している時に、追いつきラインが空いたのでアクセルを一瞬強く踏みました。スピードメーターを見ると、制限速度をオーバーしたような気がしたので、アクセルを緩めました。その時、検問中の警官が目に入りました。罪悪感を覚えながら信号待ちをしていると、旗を振りながら警官がこちらに向かってきます。「ひょっとしたらあの時にスピードオーバーしたのでは?」とドキドキしていると後続車のドアをノックしていました。胸をなでおろしました。

自分に非がなくても教師が歩み寄ってくると緊張します。「歩み寄る」とは近寄る以外に譲歩し合う、折れ合うという良い人間関係作りをも意味します。

黙って体育座りをしている子たちの背筋がさらにシャンと伸びます。緊張感が漂います。それは話しかけている子にも伝わりします。「自分が注意されるのだなあ」と気づきます。気づいてくれたら素通りします。その子に恥をかかせないためです。

それでも、気づかないようでしたら、仕方がありません、その子の隣で立ち止まります。大方の子はこれで静かになります。

注意される子にも罪悪感があり、直してくれるだろうと子どもの善意を信じるからこそできる方法です。

2 動作と音で注意勧告

先ほどは注意の対象がひとりでした。今度は多数という設定です。

Q2

体育座りで朝会の開始を待っていると、全体的にざわついている時があります。こんな時はどうしますか？

- ① 拍手をさせる
- ② 「静かに」とマイクを通して注意する
- ③ 「起立」「座る」を繰り返す



私は「拍手」をします。「拍手」といってもパチパチではなく、「マイナス」「1 拍手」です。やり方は教師がパンパンと2回手を打ちますと、子ども達はパンパンと2回手を打ちます。教師が2回の時、子どもは1回です。教師が1回の時は、子どもは0回で手を打ちません。「マイナス」「1 拍手」をするためには、教師が何回手を打ったかを聞き取る力、そこから自分が何回打てばいいのかと考える力が必要と

なります。つまり、集中しなければなりません。全体的にざわついているといってもちゃんとしている子は必ずいます。それを信じます。すると、彼らが教師の指示通りに手を打ちます。喋っている子、手遊びをしている子は「なんだ？」と驚き、辺りを見回します。「どうしたの？」と手を打った子に聞き、ことの成り行きと、ルールを掌握します。

手を打つ回数を間違えると周りの視線を集めてしまいます。すると、「今度は間違えないぞ」と教師に注目します。ほとんどの子どもがお喋りを止めて、教師の手に注目します。

そんな状況で隣に話しかける子はいません。仮に話しかけても「無視」されます。話しかけられた方は相手をしなくて済む口実ができたので、安心して「無視」ができるのです。

さあ、いよいよクライマックスです。教師は1回手を打ちます。シーンとしている中でつられて1回打つ子が必ずいます。その音は日光の鳴き竜のように体育館中に響きます。「残念でした。じゃあ、最後にもう1回いっよ」

教師は大げさに1回手を打ちます。子どもたちは教師の手の動きに合わせて首を振りまわす。シーンとなります。

「すごいね。静かになったね。じゃあ、このまま待っていてね」

子ども達の前から静々と立ち去ります。朝会や全校児童が集合するたびに「こういうことを何回か繰り返していると、私が全校児童の前に出て「じゃあ、やるよ」というだけで「拍手」の準備をします。

③も効果があります。じゃんけんの「グー」は座る、「パー」は起立、とハンドサイン

を決めておきます。それを繰り返すと静かになります。ただ、個人的には調教しているようでもったに使えません。

教師は注意、子どもは遊び感覚という指導は子ども達と良い関係を壊すことなくできる方法です。

3 肯定的な注意、否定的な注意

公衆トイレにいくと、「きれいに使っていたいただきありがとうございます」という札を見かけます。心が穏やかな時は「はい、承知しました。そうです」と素直になれますが、そうでない時は「厭味だなあ」とひねくれています。

いずれにしても、「使い方が悪いです」と書かれるよりは素直に実行しようと思います。

「廊下を走る」、これは学校の永遠の課題です。今時直線でこんなに長い廊下は学校だけです。子どもにすれば、「どうぞ走ってください」と言われているようなものです。

子どもが廊下を走っていれば教師は注意をします。両手を広げると、ぴたっと止まる子がいるかと思うと、脇の下を潜り抜ける子もいます。こういう動作の注意は言葉を使わないので、子どもの解釈の度合いで効果が表れます。

言葉で注意をしなければならぬ時の方が圧倒的に多いのです。人間関係ができていない時は、「廊下は歩こうね」と肯定語で注意します。人間関係ができてきたら「走らない」と否定的な言葉を使います。否定語を使って注意ができるようになれば良い関係ができています。

ただし、否定語を使って行動を改めたときは、「えらい」「すごい」と大いにほめます。